

# 「流行神」の誕生と靈験譚

— 横樋観音の場合 —

鈴木 岩 弓\*

Iwayumi SUZUKI

Birth of Fashionable Gods and Miraculous Experiences.

— On the Case of Yokohi (横樋) -Kannon (Avalokiteśvara) —

## 1. 問題の所在

「流行神（はやりがみ）」という用語は、これまで〈学術用語〉としてよりもむしろ、ある種の宗教現象を指し示す庶民の〈日常語〉として使われてきた。このことは、今に伝えられている、庶民生活を書き記した随筆・日記・説話等が示すところであり、また同様のことは現代の新聞のコラムなどからも窺い知ることができる。従って、実際にそのような形で取りあげられている「流行神」の語は厳密な定義でもって規定されているわけではなく、例えば、「神」という名称が用いられているが、地藏や観音といった「仏」をも包括する形でこの語が用いられることに示されるように、曖昧な使われ方がなされるのが常であった。

さてこのようなわが国における「流行神」に対する学術的研究は、これまでのところ唯一、民俗学的アプローチがこれを取り上げてきた。そして「流行神」の語が民俗学の研究文献に出てくる最初期のものの代表は、おそらく明治40年代に出された柳田國男の『石神問答』、[柳田, 1910]ではないかと思われる。また戦前に「流行神」に関する事例を取り上げたのは、同じく民俗学者の宮本常一である。彼は1940年に出された「はやり出す神」において、山口県大島郡家室西方村の荒熊神社と牛荒神、愛媛県越智郡大井村の明堂様の三つの事例を取り上げ、それぞれの施設がどのような経緯で流行ようになったかについて自分の体験も織りまぜながら報告している。[宮本, 1940]

しかしこのような柳田國男や宮本常一などによる早い時期の研究の特徴は、いずれも事例の指摘に終始するものであって、その信仰の仕組みや働きを問うような観点はほとんど見いだせなかった。言葉を換えていうなら、「流行神」と呼ばれるものが持つ珍奇性そのものに対する関心は充分持たれていたものの、そのような現象の意味や裏に隠れた構造に対する説明は計られていなかったものといえよう。

そのような「流行神」の語を学的用語として使用するようになったのは、1970年代以降に「流行神」に関する論考を次々に発表してきた宮田登が最初である。またこのような現象に関する研究をリードしてきたのも宮田ただ一人であったと言っても過言ではない。さて宮田は、大塚民俗学会編の『日本民俗事典』において、「流行神」を次のように規定している。[宮田, 1972, 584]

突発的に流行し出し、<sup>1</sup>時期に熱狂的な信仰を集め、その後急速に、信仰を消滅させてしまう神や仏である。

宮田の流行神研究の視点は、流行神が一時的な流行を終えて消滅あるいは習俗化していく点に焦点をあて、その際に発現する民衆意識の構造を明らかにしようとするものであった。従ってそこで対象となるのは過去の事例が中心で、文献資料を用いた歴史学的色彩の濃いアプローチと見なすことが出来る。中でも宮田の関心は、「流行神」が集中的に起こる場合の背後に社会的緊張ないし社会不安が対応しているという点であり、信者たちの微妙な感情が、社会変動期にあたって救い主を求め、新しい神仏を要求するというメシアニズムと関連していることであった。

宮田による「流行神」の定義はおおよそ前述のようで

\* 島根大学教育学部社会科学研究室（宗教社会学）

あるが、それ以後の彼の論考に現れた「流行神」の定義をいくつか引用してみると、以下ようになる。

突発的に流行り出して、一時期に熱狂的な信仰を集め、その後急速に、信仰を消滅させてしまう神々

[宮田, 1975a, 141]

流行神と一括される宗教現象は、……民間信仰の中の一形態であり、一時的に民衆の信仰を集めた神仏に対する名称といてよい。 [宮田, 1975b, 16]

流行神はパーッと広まり、アツというまに衰える、いわば文化現象の流行を文字通り神仏信仰にあてはめたものなのである。 [宮田, 1976]

一定期間熱狂的に流行する神仏。

[宮田, 1979, 65]

以上見てきた「流行神」は、いわば<信仰行動のあり方>に着目した定義であったわけだが、このような宮田の論考は、以後の研究者に大きな示唆的方向づけをもたらした、ある程度の共通理解が持たれていた<sup>1)</sup>。

しかし、数こそ少ないがこれと若干異った視点からの定義も見られる。桜井徳太郎による「流行病をはやらせる存在がハヤリ神である」というものがそれである [桜井, 1975, 69]。桜井はこれを宇和島地方での事例として述べているが、この定義は結局<信仰対象の持つ機能>に着目してなされており、流行性の禍厄をもたらすが故に「流行神」とする、これまでの定義に比べて限定的な用法と考えることができよう。

さらに、これまで述べてきた宮田を始めとした定義と桜井の定義の両方を指摘する立場として、伊藤唯真の定義があげられる。これをまとめると以下ようになる。

1. 流行性の病気や禍厄をもちこむ悪神
2. 福神的な性格をもって、突如信仰を集める靈験あたたかな神仏である。はやりすたりが極端であるが、一時的、熱狂的な信仰を集めた靈験あたたかな神仏である。 [伊藤唯真, 1979]

さてこのように、これまで出された「流行神」に対する学的定義をまとめてみるなら、結局伊藤の指摘した二方向からの定義がなされてきたということが出来る。ただしその内容について検討してみるなら、桜井と伊藤の1番目の指摘に見られるような流行病の原因となる神仏も実際見られるとはいえ、始めに述べた<信仰行動のあり方>に着目する宮田の指摘がより汎用性をもった現実的な定義となるものと思われる。宮田の指摘はこれまでに学的研究の定義としてなされたおそらく最初のものと思われ、実際他の研究者の多くも概ねこの立場を踏襲して定義してきたという事実がその点を示しているものと思われる。

このような定義の大筋に筆者も同意するのであるが、ただ一つ大きな疑問がある。それは宮田の定義を例に引くなら、「突発的な流行」と「急激な消滅」、即ち「極端なはやりすたれ」をその要件とする点である。ここでいうような<はやり>と<すたれ>がセットになる観点に立つなら、結局の所<はやり>の後に<すたれ>なければ「流行神」と認定されないことになる。とするなら「流行神」というのは、すべて流行の完了した過去の信仰現象、いわば現時点においてはすたれてしまった「過去の遺物」(!)に対して命名されることになる。換言するなら、「流行神」研究は歴史学的研究としては成立しても現代学的研究としては成立しないことになるのである。

果たして「流行神」と呼ばれる信仰現象にみられる流行現象は、現代学の対象として成立しないのであろうか。現実の社会において一般に聞かれる「流行神さん」といった表現自体、<すたれ>ということより<はやり>に着目して使われているのが常である。急激な信者数の増加、即ち突然流行りだしたということで日常語の「流行神」の要件を満たしていると思われているからである。この点を「流行神」の特質とするなら、「流行神」研究は流行の渦中、即ち<はやり>のまっただ中にある事例の実態調査も可能であり、さらにいえばこの段階の実態調査を無視した「流行神」研究は、一面的なものとして避けられねばならないはずである。このように考えてくると、現代学的側面から対象化する際の「流行神」という用語の定義は、さらに限定されるべきものと思われる。

そこで小論においては、文字通り「流行神」の「流行神」たる由縁を<突発的な普及>と考え、以下のように定義することとしたい。

ことさら靈威ある存在と観念され、以前よりも、あるいは同時代の他の神仏よりも、熱狂的な多くの人々から信仰対象として選択されている神仏

またここで、以前よりもあるいは他の神仏よりも流行しているということを示す指標としては、<参詣者の急激な増加に起因する宗教施設の拡大を伴っている>という事実を手がかりとして考えることとする。

さて小論では以上の「流行神」理解に立ち、岡山市の「横樋観音」を事例として次の問題を整理・検討したい。

- ①「横樋観音」が「流行神」となるに至った経緯の再構成
- ②「横樋観音」へとなされる<祈り>を手がかりに、その信仰の実態を把握
- ③以上二点を参考にして、「横樋観音」が「流行神」としての靈威を確立する際に果たした靈験譚のあり方を明らかにする。

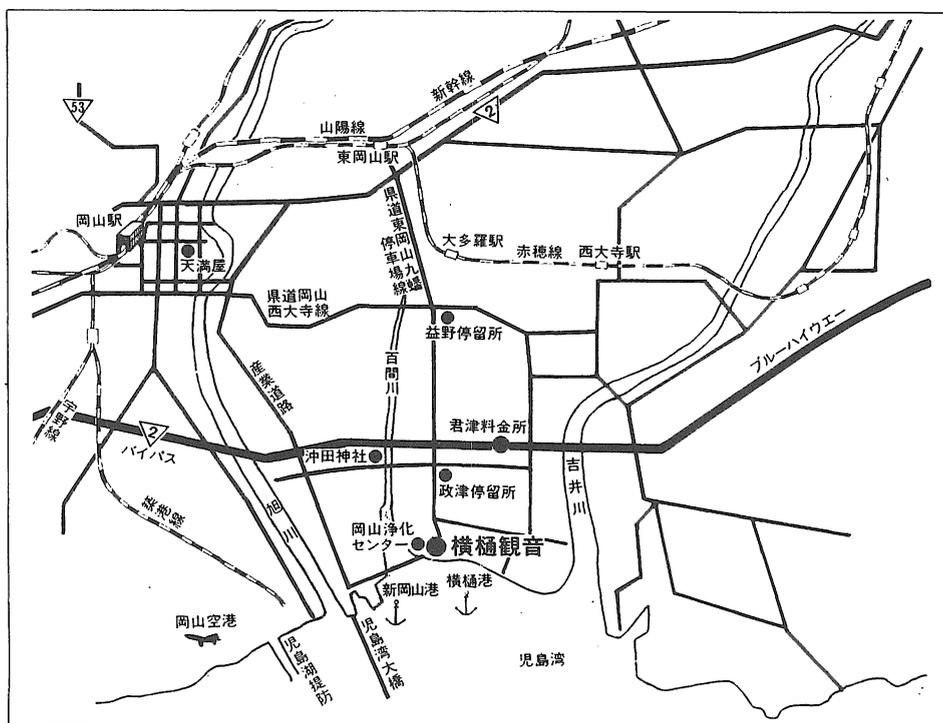
## 2. 「横樋観音」の形成過程

小論で「流行神」の事例として取り上げる「横樋観音」は、岡山市東南部の升田地区の児島湾に面した横樋海岸の小堂で祀られている青銅製の観音座像である。高さ28cm、幅17cm、重さ2.6kgのこの像は、右手で説法印を結び、左手には灑水器を持っており、ふくよかな表情で鎮座している。この像の製作に関する情報はいっさい不明であるが、一説によると中国明代末の作ともいわれている<sup>(2)</sup>。本章ではまず、この観音像がこの地に祀られるに至った経緯を、関係者などからの聞き取り調査を手がかりにまとめてみることにする<sup>(3)</sup>。

観音像が発見された横樋海岸というのは、東遙かに小豆島を望む、児島湾に面した地区である。この地は元禄の初め、備前池田藩によって干拓された旭川と吉井川に挟まれた三角州で、いわゆる沖新田と呼ばれてきた。以前までのこの地区は、海苔の養殖と四ツ手網漁で生計を立てる半農半漁の村であった。昭和33年より干拓が開始されると共に生活にゆとりが見られるようになり、近年では地区の37戸全戸が建て替えを行っている。観音像の見つかった海岸部は前々から埋立計画があったが、いろいろな事情で計画が延び延びに遅れており、この当時までまだ砂浜のままであった。

「横樋観音」がこの地で祀られるようになったそもそのきっかけは、昭和57年の9月5日、釣りをしていた近所に住む二人の小学生が、波打ち際に上半身だけ出して砂に埋まっていたこの観音像を発見したことであった。この像が「仏像」であることは、小学5年生と6年生の子供である二人にとっても一目瞭然で、粗末にならないようにこれを掘り出して海水で洗い、すっかり砂を落として岸辺の堤防の下に安置した。その後、魚が釣れるように拌んでお願いしたもの、そのような場所から仏像が出てきたことは「気味が悪い」ことであったので、その日はそのまま放置して帰宅し、この日の出来事自体、しばらく忘れていたという。

小学生の発見から半月ほど経った9月中旬ごろ、横樋海岸では恒例の漁業組合主催の海岸清掃作業が催された。この時堤防の下から見つけられた観音像は、一旦はゴミ収集車まで持って行かれたが、運転手が受け入れを拒否した。これに気づいた近所に住むA氏は、「粗末にならぬように」と、金比羅さんとリンゴン（龍宮）さんと共に以前から堤防の上で祀っていた地藏像の脇にこれを移して祀ることとした。このことがあってから、地藏を拝みに来た人々の間にこの観音像の存在が口伝えに地域に広まっていき、それと共に観音像そのものを拝みに来る人も見られるようになったという。



(図1) 「横樋観音」の所在地 (横樋観音奉賛会発行のパンフレットより)

12月にあったお地藏さんの清掃中に、A氏からそのいきさつを聞いた地区の長老であったB氏は、昭和58年の1月2日に開催された地区の寄り合いの際に、「地区の責任できちとした形でこの仏像をお祀りしよう」と呼びかけた。そして具体的な祀り方などについては、地区の中でも信心深いと認められている女性のC氏に相談することとした。C氏は早速、個人的に十年來世話になっている岡山市金岡でD不動講を主催しているオガミヤのD祈禱師に電話で相談した。するとD祈禱師は、電話口で即座に「観音様が香の香りを聴きたいと云っている」と判断を示した。そこでこの仏像を祀るきっかけを作ったA氏とC氏の夫が、その日の内に観音像をD祈禱師の所へ預けに行くこととなった。

D祈禱師はそれから十日間ほど観音像のお清めをし、さらには「入魂の法」を修した。するとある晩観音を拝んでいると、突然観音が「横樋に帰って三十三変化し、困っている者を皆助けてやる」というお告げを下した。そこでD祈禱師がいつ横樋へ帰るのかを問うと、「18日」と答えたという。このことが伝えられると、これまで観音に関与してきた人々が中心となって、1月18日の日に横樋で観音の開眼供養を催すこととなった。そしてまた、その機会に間に合うよう、以前観音像を安置していた地藏の祠の横に、新たに観音のための厨子を作ることとなり、町内の船大工がこれを製作した。

供養の前日は、当地の冬としては希に見るような風雨であったが、当日観音をお迎えに行った午前10時頃には小降りとなり、観音像が横樋に着いたときには雨も風もすっかり止んでいた。そして用意した厨子に観音を安置すると、D祈禱師の司祭のもと無事開眼供養をすませることができた。

ところが、一時間ほどの開眼供養の祭典が終わると風雨は再び激しくなり、荒天は結局その日一日中続くこととなった。そのような中、強風に煽られた一對のローソクの滴同士が飛び散りながら真真中で固まり、その形があたかも羽根を広げた鳳凰のようになるという不思議なことが起こったという。ちなみにその前夜、C氏は大きな鳳凰が長い尾を風になびかせながら海から舞い上がって来る夢を見ていたため、このことは観音の起こしたありがたい奇瑞であると考えた。そしてこの話は、観音の靈威を保証するものとして、この時の参詣者の間に伝えられることとなった。またこれと同時に、開眼供養前後の異常なまでの風雨の状態についても、供養を行なうにあたっての「清めの雨」だったのだろうという解釈が、自然発生的に世話人達の間でなされるようになったという。

この日の参詣者の間から、「おかげを受けた」という人々が出てくるようになったのはその後間もなくのことであった。例えば翌19日には、B氏はそれまで患っていた足の痛みがとれ、C氏も同じく腰痛が完治したのである。このような奇跡ともいべき体験談は、升田地区の人々を中心にパーソナルなコミュニケーションで広まり出していったが、同時にまたD不動講の信者によって、もう少し広い、岡山市内の他の地域の人々にも伝えられることとなった。

そうなると近隣の人々を中心に、日に日にここへの参詣者数が増加するようになってきた。そこで今後の観音の運営の仕方を考える参考として、3月7日には世話人のうち7人で、やはり「流行神」として多くの参詣者を集めている広島県府中市の「首無地藏」へ出向き、運営のノウハウなどを研修して来た<sup>(4)</sup>。その結果まず、たまたま開眼供養を行った18日は一般に観音の縁日とされていることもあって、この日を「横樋観音」の毎月の縁日とすることに決定し、3月から実施されることとなった。そしてまた堂も早急に作ることになり、そのための地鎮祭も併せて3月18日に行なうこととした。

横樋海岸において繰り広げられているこのような一連の経過は、地元地方紙である『山陽新聞』に勤務するC氏の弟の知るところとなり、これまでの経緯が3月17日の同紙のコラム、「緑地帯」に観音の写真入りで取り上げられることとなった。また翌18日の縁日の模様も地元の市議の紹介で知ったNHKが取材に訪れ、テレビとラジオのローカル・ニュースで流されることとなった。



図2 『山陽新聞』に掲載された「横樋観音」の記事  
左下：3月17日 右下：3月25日

このようにそれまでの口コミのみならず、マスコミでも紹介されるようになると参拝者の大幅な増加が見られるようになり、またその信仰圏も次第に拡大されていった。

さらに『山陽新聞』では3月25日の夕刊で、「海から上がった観音様／御利益聞いて参拝客わんさ／東京、大阪からも毎日平均100人／お堂建て新名所に・地元熱気／不安時代の縮図かな？」といった見出しで、そのような賑わいをも含め写真2枚と地図1枚を配置した記事を一面のトップに掲げた。その結果、堂の竣工式も併せて挙行された5月18日の縁日には、2000人近くの参詣者が集まって落成を祝ったという。

さてこのように参詣者の増加が見られるようになってきた「横樋観音」であるが、これは漂着仏とはいえあくまで漂着物の一種であったため、取得物として市へ届け出をした。市はこれを受けて『市政だより』で公示した。その結果持ち主として名乗りをあげた人もいたが最終的には持ち主が確定できず、結局町内会へ管理が任せられることとなった。

これらの祭りを司祭する聖職者は、出現以後の世話を担当してきたD祈禱師が引き続き行ってきた。毎月18日の縁日には、D祈禱師と共にやってくるD不動講の行者等によって護摩木が焚かれることとなり、この形式は現在に引き継がれている。またさらに、1月1日を「元旦祭」、堂を建立した5月18日を「春大祭」、観音が海から出現した月である9月18日を「秋大祭」として、この3回は「年大祭」として祭典が催され、殊に多くの参詣者を集めるようになってきた。

そのように宗教施設としての整備が進められるうち、増加する参詣者への対応は世話人だけでは人手不足となってきた。しかしちょうどそのような折り、地元の60歳以上の人々で構成されている「老人会」から協力する旨の申し入れがなされ、堂横に作られた接待所などの運営は老人会中心にまかされるようになった。しかしこのような形の組織も、昭和61年の春にあったメンバーの移動などがきっかけとなって再考が迫られることとなった。その結果、町内の20戸ほど世話人が集まって「横樋観音奉賛会」を結成し、交代で接待するよう再組織化が計られることとなった。また一方、参拝者がこの観音に関わる際の便を計って、同年7月18日にはこれまで観音のおかげを得たという人々の体験談をまとめ、B4の紙を二つ折りにした『横樋観音礼賛記』（以下『礼賛記』）の第1号を発刊した。またこれは、翌昭和62年の1月1日には第2号が、そして昭和63年の1月1日には第3号が刊行され、これも無料で配布されている。

この当時まで観音は、堤防内側の広場に建てた堂の中

に安置してあったが、大祭などで参拝者が多い場合、交通渋滞を引き起こすこともしばしばであった。そこで昭和63年の12月には、堤防からやや離れた現在地に移転することとし、以後境内地の整備が図られることとなった。そして平成3年10月10日には新たな堂を建てるための地鎮祭が挙行され、引き続き11月14日には堂の建て前が行われた。

### 3. 「横樋観音」に対する信仰の実態

#### －「参拝ノート」の分析－

さて以上のような経緯を経て「横樋観音」は、多くの参詣者を集める「流行神」として定着してきた。そこで本章においては、そのような「横樋観音」に対する信仰の実態を探り、参詣者の行動や意識を明らかにすることにしたい。これらの把握によって、この信仰における靈験譚の位置が明らかになるものと思われるからである。

ところで「横樋観音」へと参集する人々の間には「講」のような組織は見いだされず、さらにまた奉賛会の側でも参詣者獲得のための「御師」のような積極的働きかけは確認されていない。そのような意味から、「横樋観音」に対する信仰は非組織的参詣者により担われていることが予想される。そのためここでは、実態把握するための資料として、「横樋観音」へやって来る参拝者に対して、祈願あるいは御礼などを自主的に記載してもらうように、お堂の横に置いているノート（以後「参拝ノート」と仮称）の記述を使うことにしたい。

使われているノートは市販のB5版の横罫のもので、書式などは一切決まっておらず、参詣者の自由な記述に任されている。そのような中、記入された事項のうち主なものを列挙するなら、参拝日付け・氏名・年齢・住所・折りの内容などがあげられている。調査の過程におき、筆者はそのような「参拝ノート」の一部を閲覧する機会を得た。ここではそのような記述のうち、昭和58年4月17日から昭和62年6月21日までの間の記録、総数309件を取り上げて分析を試みることにする。

#### (1) 参拝者像

まず初めに、氏名や祈願内容から性別の明らかなものをまとめて見ると、男が106人に対し女が132人になる。ただし一件の祈願に対して複数の氏名が見られる場合は、記名されている名前から男女いずれかを判断し、その人数を男女に振り分けてカウントした。なお複数記名は14件で、男・女1人づつのペアが10件確認された他は、男2人と女1人、男と3人と女1人、女2人、男1人と女2人がそれぞれ1件づつ見られた。

年齢を明記したものはごく僅かであるが、明かなもの内で最も若いのは8歳、最高年齢は85歳であった。縁日に非参与観察を行ったときの感触からすると、参詣者の平均年齢は高年齢になるのではないかと推察していたが、「参拝ノート」に記入した参詣者の場合は、そこに書かれた内容から判断するならば、必ずしも高年齢の人とは限られていないようである。

また職業に関しては、明記されているものはほとんどない。しかし、上級生に対する思慕の気持やクラブ活動に関する内容の〈祈り〉という点から、おそらく中・高生によるものと判断される〈祈り〉が15件ほど確認される。また職業というわけではないが、暴走族に所属している、とおぼしき若者の「今年は特攻隊長として名前をうってきました。誰も大したケガもなくやってきました。本当にありがとうございました」といったような御礼も4件見られた。これらの例も、参詣者の年齢が必ずしも高くはないことを示すものである。そのような中において、「〇〇大学を卒業でき僧侶として働いています。どうもありがとうございました」という現役の僧侶による御礼は、祈願をした事情は定かではないが、既成宗教団体に所属する聖職者による関わりとして興味深い。

#### (2) 信仰圏

「参拝ノート」に自分の住所を記載した参詣者は約半数の159人で、残り150人は無記入であった。そこで住所の明らかなものに限って整理してまとめたのが〈表1〉である。ここより「横樋観音」参拝者の居住範囲は岡山県内だけで88.2%を、さらにいえば観音像の鎮座している岡山市内だけで59.7%を占めていることが明らかになる。この点から、「横樋観音」に対する信仰は、かなり明確な地域性を持って営まれていることが明かとなる。

〈表1〉「横樋観音」の信仰圏

〈岡山県内〉 135 (88.2%)			
岡山市	95	備前市	1
倉敷市	4	赤磐郡瀬戸町	2
津山市	3	山陽町	2
玉野市	6	和気郡日生町	2
総社市	2	佐伯町	1
高梁市	2	和気町	1
〈岡山県外〉 24			
兵庫県	6	千葉県	1
広島県	6	埼玉県	1
大阪府	5	静岡県	1
東京都	2	高知県	1
		U. S. A.	1

#### (3) 参拝の契機

〈表2〉から明らかなように、「横樋観音」参詣の契機となったのは、家族内コミュニケーションによるものが多い。その中でも女性の間のパーソナルなコミュニケーションが、多くの場合の情報源となっていることが推定される。

また、宗教的特殊能力者である祈禱師のアドバイスを契機とするものも数の上では良く聞かれるが、このような宗教者に関わって、その指示に従うというのも一般には女性が多いようである。さらにまたTVというマスメディアも、ある程度影響力が強く、祭典時の様子を報道したNHKなどのニュース番組は、参詣者の再生産に影響力を持っていることが明らかである。

〈表2〉参詣の契機

参詣の契機	件数
娘より聞いて	34
巫女さんなどを通じて	30
母より聞いて	16
TVの報道を見て	13

#### (4) 信仰対象に対する認識

名称の上からも、形態の上からも、「横樋観音」は仏に所属することが当然と思われるが、「参拝ノート」に記された呼びかけからは意外なことに、この像を「観音」とする認識はもちろん、仏であるという認識すらかなり希薄であることが明らかになる。記述の中に現れた具体的な呼びかけでいうなら、「お地蔵様」の56件と「神様」の35件のみである<sup>(5)</sup>。このことを厳密な教義的観点からいうなら、誤った認識で観音にかかわっている人々が結構いることを物語っていることになるが、実際そのようなレベルの問題に拘泥していないのは、「横樋観音」に対する信仰が庶民信仰の一つであることに起因しているよう。

#### (5) 参拝者の〈祈り〉

信仰現象の本質的な部分というのは、究極的な存在に対する関わりである。人がそのような存在に対して関わる際には、一般に〈祈り〉を通じて交感するものと考えられる。となると、人々の神仏に対する〈祈り〉の内容を把握することによって、その信仰現象の本質部分をある程度把握することが可能となることになる。そのような観点に立って、「参拝ノート」に記された〈祈り〉に着目し、まずそこに書かれた祈願内容を、複数回答もすべて整理して書き出すなら次頁の〈表3〉のようになる。

また数が最も多い「身体不調の回復」に分類した〈祈り〉を、具体的な内容で整理し直すと〈表4〉のようになる。

<表3> 「横樋観音」に対する祈りの内容

祈 願 内 容	件 数	祈 願 内 容	件 数
身体不調の回復	44	スポーツ上達	2
身体堅固	14	子育て	1
家内安全	11	厄守り	1
良縁祈願	9	長寿祈願	1
合格祈願	7	心願成就	1
開運招福	6	就職祈願	1
学業成就	5	故郷へ帰れる	1
子受け	4	手切れ成就	1
商売繁盛	4	ブール嫌い治る	1
交通安全	3	クラブ活動成功	1
背が高く	2	言葉上達	1
仲良く	2		

<表4> 「身体不調の回復」の祈りの詳細

身体の部位		病 気 ・ そ の 他	
足	15	病気	4
腰	3	手術	3
目	2	身体の不調	3
頭	2	肥満	2
耳	1	吃り	1
手	1	声	1
		痛み	1
		成人病	1
		とびひ	1
		オフロウゼ	1
		喘息	1
		水疱瘡	1

以上の結果より、「横樋観音」に対する祈願内容が多岐にわたっており、この観音が機能神的に少数の祈願に絞られて信仰されているのではなく、全能神的に関わられているという実態が明らかになってくる。ここで病気平癒や身体堅固が多いのは、時代背景の影響もあると思われるが、多方面に亘る祈願内容については、女子中・高生のゲーム感覚の祈願が影響しているものと考えられる。

人が神仏に関わる場合、その関わり方は内容から、祈願・供養・御札の3種に分けて考えることが一般的である。生の祈り、すなわち現世利益を希求する「祈願」と、死の祈り、すなわち死者の回向を目的として希求される「供養」、そしてそれらの祈りが成就したことに対する感謝の意を表する「御札」である。このような観点から、「参拝ノート」に記載した309人の参詣者たちの祈りの内容を分類してみると、<表5>のようになる。

<表5> 祈りの種類

祈りの種類	件数
祈願	88
供養	0
御札	194
祈願+御札	7
N. A.	20

以上より明らかなように、「横樋観音」に対する参詣者の間からは、これを供養対象とするサンクションは、全

くなされていなかったことがわかる。つまりここへとかかわる人々にとっては、「横樋観音」はあくまで祈願対象=現世利益信仰の対象であって、「御札」の場合もその内容の明らかなものはすべて祈願が成就したための「御札」としてなされていることが明らかになる。

#### 4. 「横樋観音」の霊威の伝達

見てきたように「横樋観音」は、もとは海辺に見捨てられていた観音像であったが、ある時これが発見されたことをきっかけに祭祀対象として祀り上げられることとなり、さらには熱狂的な信仰対象として生まれ変わったということができる。そのような流行神化の過程においては、この観音が霊威ある存在であることを示す言説、いわゆる「霊験譚」をしばしば聞くことができた。ある意味では霊験譚の普及を通じて、「横樋観音」の流行神化が進められたということもできよう。本章においてはこれまで見てきたことを参考にしながら、「流行神」が形成されていくメカニズムを霊威の伝達、とりわけ霊験譚の普及に着目して探ることにしたい。

そこでまず、前章でまとめてきた「横樋観音」形成史を、霊験譚の伝達媒体に着目して整理するなら<表6>のようになる。

<表6> 「横樋観音」形成史

	時期	霊威の保証	霊験譚	伝達形態	信仰圏
第1期	S.57 9.5 }	・素朴な観念 →〈消極的祭祀〉		(口コミ)	升田地区
第2期	S.58 1.2 }	・D祈禱師の判断 ←祈禱師自身の宗教的権威	宗教者の解釈譚	口コミ	升田地区
第3期	S.58 1.18 }	・奇瑞 ・〈おかげ〉 ←庶民の体験	俗人の解釈譚	口コミ	升田地区 D不動講
第4期	S.58 3.17 }	・新聞記事 ・〈おかげ〉 →霊威の文字化 ・マスコミの権威	『山陽新聞』 NHKニュース 『礼賛記』	マスコミ 口コミ	岡山市 岡山県内

ここから明らかなように、「横樋観音」形成史は四期に分けて考えることができる。第1期は観音像の発見以後D祈禱師の判断が下される前までで、この時期は出現した

仏像の出自も不明であり、あいまいな状況のもとで消極的に祭祀されていたに過ぎなかった。ここでいう〈消極的祭祀〉というのは、誰しも出現した像が仏像であるという理解は持ち、仏像ゆえに粗末にならぬよう祭祀すべきと考えつつも、他方思わぬ所から出現した素性の知れない仏像だということで一抔の不安感も併せ持つ、といった状況にある庶民の選択した一つの反応と見ることができよう。最初に観音像を発見した小学生の場合に、「気味が悪い」ということが述べられていたが、このことがまさに消極的祭祀の背景にあるというわけである。このような状況にあるため、第1期においてはこの観音の靈威を示すような靈驗譚は一つも確認されていない。

次に第2期は、D祈禱師が電話口で判断を下して以降1月18日の開眼供養時までで、宗教者であるD祈禱師によって一連の判断が出された期間である。この間に出された判断は、宗教者として定評のあるD祈禱師による解釈で、その内容は力ある祈禱師の持つ宗教的權威を基礎とした靈驗譚として関係者の間に口伝えて広まっていった。この時に広まった靈驗譚のうち特に、「横樋に帰って三十三変化し、困っている者を皆助けてやる」というものは、それまで素性の明かでなかった観音像が、実は自分達の守護に役立つとういう意思表示をしたと解釈されるようになり、これを機に第1期に見られた「気味悪さ」は解消され積極的祭祀がなされるようになった。

第3期は開眼供養直後から新聞報道の前までである。この時期の靈驗譚は、専ら俗人の解釈によって生み出された点に特徴がある。時間の流れに沿って説明するなら、開眼供養直後の奇瑞が最初のきっかけになった。即ち、供養終了後にたまたま一對のローソクの滴が強風に煽られてくっつき合い、羽根を広げた鳳凰に見えたということが起こったが、これをC氏は前夜に見た自分の夢と結び付けて「奇瑞」と解釈したのである。これに対し、ローソクの奇妙な状態を見た人々は、C氏の解釈譚を観音の靈威の確認と受け止め、靈驗譚が成立したものと考えられる。

また次に、あたかも開眼供養の儀礼を行っていた時間だけを避けるようにこの地を襲った稀にみる風雨に關し、「清めの雨」という解釈がなされたことが指摘できる。この解釈譚は、開眼供養に参加した俗人達の間から、誰いうことはなく広まったものである。この季節にしては異常な降り方の雨であったが、これが人々の間に、そのような天候の背後に超自然的な何物かの存在を予感させる観念連合を生み、靈驗譚として成立したものと見なすことができる。

さらにまた、開眼供養の翌日より続出してくる、この

観音に参ったことでそれまで治らなかった身体の不調がすっかりよくなった、即ち、観音の〈おかげ〉をもらって完治したという解釈譚が広く伝播されるようになった。このような個別の体験談は、あくまで不調の治った俗人自身の解釈が判断材料となっているわけであるが、この解釈譚が口伝えに伝達して行くに従い、観音の靈威を示す一つの事例として靈驗譚化していることが明らかになる。

当然のことであるが、この場合の靈驗譚は〈おかげ〉をもらったという人がいれば、その人々の数だけ成立することになるわけで、それらの内容は特に女性を中心にした社会的ネット・ワークを通じて、パーソナルなコミュニケーションで伝達されている。このネット・ワークこそが、前章で明らかになった参詣の契機を導くものでもある。そしてこのネット・ワークの中にいる人々は、伝播してきた靈驗譚を何らかの救済を求めている人々に対してさらに伝播していくこととなる。

さて最後の第4期は、『山陽新聞』に記事が掲載された昭和58年3月17日以降現在に至るまでである。これだけの長時間を一つの区分に入れる根拠としては、この時期に入って以後、それまでは口頭で伝達されていた靈驗譚が文字化された点あげられる。最初に新聞報道のあった3月17日の記事では、例えば「Cさん(55)=升田〇〇番地=はお参りしているうち足の痛みがスーッと引いた」といった表記の仕方で、第3期に登場してきた〈おかげ〉にまつわる靈驗譚が引用されている。実際のこの記事では、実名と正確な住所が明記されているのであるが、このことは恐らく、記事そのものの信憑性を高める効果を生んでいるものと思われる。またこのことは逆に、主に岡山県をシェアとした地方紙である『山陽新聞』が「横樋観音」の靈驗譚を取り上げたということ、この新聞自体の持つ權威によってこの観音の靈驗が保証されたということも併せて意味している<sup>6)</sup>。

取材に基づくNHKのニュースもまた、文字化という固定的な靈威の保証とは異なるが、これと同様の効果をもたらしていたものと考えられる。

またさらに、昭和61年の7月18日に『礼賛記』の第1号が発刊されたことも、同じく靈驗譚の固定化に大きな力を持ったものと考えられる。この礼賛記は、奉賛会で発行しているB4版の紙の裏表に印刷された情報誌であるが、その内容の四分の三程度が〈おかげ〉をもらった人々の体験談で占められている。載せられている記述内容は住所、氏名そして体験談であるが、特に新聞とは違い、一人称の体験談として靈驗譚が語られていることが特徴的である。この礼賛記は現在までのところ第3号ま

で公開されているが、最新号は随時無料で配布されている。そのためここへ一度参詣した人から、『礼賛記』は人手を渡って数多くの人々に読まれる可能性を持っており、その意味でも霊験譚の伝播や固定化に役立っているものと思われる。

このように新聞記事や『礼賛記』は、ある意味ではそれまで一過性であった会話を媒体とした霊験譚を、文字化して回定化し、その内容を正確に反復して伝達することを可能にしたものと考えられる。このことはさらに進んで、複数の霊験譚が「横樋観音」の縁起としてまとめられて展開していく可能性をも秘めているということができよう<sup>(7)</sup>。

以上のようにして、「横樋観音」の霊威は霊験譚の伝播を通じて確認され広められていったものといえる。この間には、出現直後のあいまい状況以降、多くの人々による状況把握のための意味解釈がさまざまになされていた。そのような中、〈宗教者による解釈譚〉や〈俗人による解釈譚〉の幾つかが、「横樋観音」の霊威を証明する霊験譚として伝播していった。そしてさらに、そのような霊験譚が文字化されることでさらなる伝播を引き起こし、急激な参詣者の増加が見られたものといえよう。こうして見ると、それらの解釈者や伝播者など、多くの人々の集会的相互行為から解釈譚が固定化されて霊験譚化され、この過程を経ることで「横樋観音」は「流行神」へと展開していったことが明らかになる。

付記：小論は、平成2、3年度の文部省科学研究費補助金、一般研究(C)(研究課題：「流行神」の形成とその展開に関する実証的研究—中国地方の事例を中心に—、研究代表者：鈴木岩弓、研究課番号：02801006)の援助のもと実施した調査研究の成果の一部である。

## 注

(1)そのような影響を受けて「流行神」に対する定議を行ったのは、菊地健策及び榎陽介と大嶋善孝である。彼らは、辞典や事典の「流行神」の項目を執筆しているが、その内容は宮田の指摘の域を越えることなく踏襲したものであった。

突発的にその存在が目され、一定期間熱狂的な信仰を集めるが、その後急速に信仰が消滅してしまいかえりみられなくなってしまう神や仏に対する名称。

[菊池健策, 1980, 236]

突然始まり、一時的に熱狂的な信仰を集めるが、のちに急速に信仰が衰退する神や仏。

[榎陽介・大嶋善孝, 1985, 701]

(2)岡山県立博物館の鑑定により、中国の明代末(17世紀前半)の作品とされている。

(3)本文でも触れたように、小論においては「流行神」を〈はやり〉に着目して定義している。そのため、流行の最初期を良くご存知の方から直接生々しい体験談を聞くことが可能となった。小論執筆のためには多くの方々のご教示を得た。プライバシーの問題等もあるためお名前をあげることは差し控えさせていただくが、紙面を借りて感謝の意を表したい。

(4)広島県府中市の「首無地蔵」は、昭和52年に夢のお告げ通りに土中より出現し、それまで苦しんでいた病気が参詣した直後から完治するという「奇跡」が続出し、多くの参詣者を集めている。この地蔵に対する信仰の特徴は、俗人により運営されていることである。この地蔵に関しては、拙稿[鈴木, 1988]を参照のこと。

(5)このうち前者は、おそらく「首無地蔵」との誤解に基づくものと考えられる。

(6)一般に、新聞報道において宗教関連の記事を扱う場合、対象とする宗教の宗教的権威に対する部分はカッコに入れて判断停止にすることが普通である。というのは、特定の宗教的権威のみを取り上げることが、中立の立場を前提とする新聞社の立場と抵触するからである。従って新聞記事では「○○のカミサマはご利益がある」などといった記事を出すことは極力避けられ、「○○のカミサマがご利益がある」といって多くの人が集まっている」といった伝聞態の使用など、ワンクッションおいた表現で扱われるのがせいぜいである。そのような宗教施設に対して、その新聞が宗教的権威を保証しているという印象を与えることを避ける配慮からである。なおあくまで筆者の感覚的な印象だが、『山陽新聞』は他紙に比べて宗教関係の扱いが多く、さらにいうなら他紙より一步踏み込んだ宗教記事が多いように思われる。広島県府中市の「首無地蔵」が出現した最初期に新聞報道を行ったのも『山陽新聞』であり、またこの時の一連の報道が「首無地蔵」信仰形成に多大な力を与えた点については以前触れたことがある。[鈴木, 1988]を参照のこと。

(7)「縁起」の多くは、複数の霊験譚相互に関連付けを行って成立している。縁起作成時の、その宗教施設の権威が高いものほど内容構成が複雑化する傾向が高い。

[鈴木, 1992, 6]

## [参考文献]

伊藤唯真, 1979「祟り神・流行神」, 桜井徳太郎編『講座

- 日本の民俗 7 信仰, 有精堂。
- 榎陽介・大嶋善孝, 1985「はやりがみ」, 『日本宗教事典』, 弘文堂。
- 菊池健策, 1980「流行神」, 桜井徳太郎編『民間信仰辞典』, 東京堂。
- 桜井徳太郎, 1975『民間信仰』, 塙書房。
- 鈴木岩弓, 1988「流行神の誕生 — 『首無地藏』を事例として —」, 『地域社会教室論集』No. 4, 島根大学法文学部地域社会教室。
- 鈴木岩弓, 1992「寺社縁起にみられる神仏出現譚 — 『雲陽誌』を手がかりに —」, 『山陰民俗』第57号, 山陰民俗学会。
- 宮田 登, 1972「流行神」, 大塚民俗学会編『日本民俗事典』, 弘文堂。
- 宮田 登, 1975「民間信仰と現世利益」, 『救い』, 弘文堂。
- 宮田 登, 1976「流行神の性格」, 和歌森太郎編『日本宗教史の謎』下。
- 宮田 登, 1979「祀り棄ての論理」, 『歴史公論』3-9, 雄山閣。
- 宮本常一, 1940「はやり出す神」, 『民族文化』第8号, 山岡書店。
- 柳田國男, 1910『石神問答』(『定本柳田國男集』12, 筑摩書房)。